



【共に結び合わされ建てられて行く主の教会】

聖書本文:第一コリント 12章 12-27節・ 暗唱聖句:エペソ人への手紙 4章 16節

説教者: 鄭南哲牧師

愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族のみなさん！一週間の間もみなさん元気でしたか。もう先週末からすでに入っている方々もいると思いますが、今週から始まるGW期間、良い休息と再充電の時として過ごせるように祈ります。今日はわれらのクリスチャンプレイズチャーチがどうすれば主の恵みにあって一つの家族として正しく、力強く建てられて行けるのかを神様の御言葉をとおして調べてみたいと思います。

もちろん、われわれは必ず教会にかよわなくても家で、自分でイエスキリストを信じて救われる事も不可能ではないと思いますが、聖書にも書かれている通りにやはり信仰を持った者は共に集まって、ともに主に礼拝する特権が与えられているわけですから、教会に来るわけです。しかし我々は教会で信仰の生活をしながらときどき傷つきあってしまっ、もう教会はいらないと思ってしまう人もいます。それが恐ろしく、いやだと思込んでいる人たちの中で最近自分の家で一人でインターネットを通して礼拝を守ろうとしたり、一人でメッセージのテープを聴きながら一人ぼっちで祈ろうとする人もいると聞いています。ある人は教会の集まりは損う事ばかりだと主張する人もいます。ある異端のところではかえって今地上の教会たちは全部悪魔の支配にあるから教会はいらないと教えているところもあります。

<1. 教会は何なのか？>

しかし、それは神様の御前で決して正しくありません。聖書が教えている主の教会は単数つまり一人ではありません。今日の本文12,14節によると主の教会をイエスキリストの体であると比喻しながら、その体は一つの器官ではなく、多くの器官から成っていると教えています。ここで各器官とか部分は主の教会の中信徒たちを意味しています。

だから主の教会は主を信じ信仰告白する者たちの群れ、共同体(ヨハネ10:27-28、第一ペテロ5:3、エペソ2:13-22)、イエスキリストを信じている神の家族(エペソ2:19)だと書かれています。(「教会」とは、ギリシャ語の「エクレシア」という言葉を翻訳したもの。このエクレシアの意味は、「呼び出された者たち、集会、会衆」を意味する。建物の事ではなく、キリストの血潮によって買い取られ、この世から召し出された者たちという事。)

<2. 教会の主人はだれなのか？>

それでは愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族のみなさん！この教会の主人は誰でしょうか。牧師ですか。役員や執事でしょうか。そうではありません。聖書には明確に教会の主人はイエスキリストご自身であると書かれています(マタイの福音書16:18-“わたしはこの岩(“あなたは、生ける神の御子キリストです。”のような信仰告白)の上にわたしの教会を建てます。ハデスの門もそれには打ち勝てません。”)。

使徒の働き20:28(“あなたがたは自分自身と群れの全体とに気を配りなさい。聖霊は、神がご自身の血をもって買い取られた神の教会を牧させるために、あなたがたを群れの監督にお立てになったのです。”)を見ると神様は教会というのはイエスキリストがご自身の血をもって買い取られた、すなわち、キリストの命と代わった尊いものであり、ご自身と同じであると書かれています。そしてイエス様は教会の頭(コロサイ人への手紙 1:18“また、御子はそのからだである教会のかしらです。”)だとも言われています。

イエスキリストが教会の主人であり、キリストを救い主として信じ、信仰告白する者たちは教会の頭、主人であられるイエスキリストに従うべきである事を教えて下さっている内容でしょう。

ですから愛する皆さん！精神的に健康な人が自分の体を苦しませたり、離れさせようとしたり、自害(じがい)する者はいないように、キリストを正しく信じ、救い主として愛すると告白しながら主の教会から離れたり、愛さないとするなら、きつとおかしいと思います。そして我々は主の御体である各器官、部分としてお互いがいつも一つのイエスキリストによってみなが補い合うことによってしっかり組み合わされ、結び合わされて、おのおの部分は分にに応じてともに働いて体を成長させ、自ら愛によって作り上げられてゆくべきであると書かれています。何方がエペソ人への手紙4章 15-16節を読んでくれませんか。

“むしろ、愛をもって真理を語り、あらゆる点において成長し、かしらなるキリストに達することができるためなのです。16 キリストに

よって、からだ全体は、一つ一つの部分はその力量にふさわしく働く力により、また、備えられたあらゆる結び目によって、しっかりと組み合わされ、結び合わされ、成長して、愛のうちに建てられるのです。”

<3. 教会はキリストの体であり、我々は各器官であるという意味は？(27 節)>

今日の本文に戻って使徒パウロはキリストの教会を人の体(教会はキリストのからだであり、いっさいのものをいっさいのものによって満たす方の満ちておられるところです。(エペソ1:23))にたとえました。ここにもっと集中し、考えてみたいと思います。どうしてパウロは主の教会を人の体にたとえたのでしょうか。簡単に見てみると、12節のように人の体は一つでありながら多くの部分があってその多くの部分はまた全体が一つの体に全部繋がっている事を説明しています。簡単に言いますと、これを通して**主の教会の体を構成する私たち一人、一人だれでもみながそのように主の教会のためみんな必要で重要な一部分である事を知ってほしかったためなのです。**主の教会にいろんな人たちが集まっています。しかもいろんな人たちがみんな違いますが、一つキリストの信仰をもっているのならみなキリストから与えられ、キリストに属されているもの、主の教会にいなければならない大事な各器官であることをまず覚えるべきです。エペソ人への手紙 5:23“なぜなら、キリストは教会のかしらであって、ご自身がそのからだの救い主であられるように”)

そしてパウロが主の教会を生命がある人の体にたとえた事はかなり深い意味があると思います。**人の体は生命体であり、有機体です。生きているものです。そのように主の教会も命があります。**もし自分の頭が悪くて、あるいは頭が大きくて邪魔だから切ろうとか変わろうとかすると人の命は危険になるか命が失ってしまって体全体が死んでしまいます。同じように生きている主の教会の部分であるだれが自分なりに切ったり、変わったりするのはむしろ教会全体に深刻な危険を与える事になってしまうのをいつも忘れてはいけません。もちろん癌細胞(がんさいぼう)ができたならなるべく早めに手術して取るべきであるようにもし教会の家族に異端っぽい信仰で誘う人たちが教会に入ったら、教会の信仰の純潔、そしてみなさんを守るために警戒し、早めに追い出すべきです。

だから愛するみなさん！**我々は教会の中ではいつもキリストの一つの体の信仰を持ちましょう。**すなわち、一つの体の中でみんなが違いますが、全部がかならず必要で大切な器官だと信じる信仰です。15節のように、かりに私たちの体の中で腕(うで)が一つなくなったと考えてみてください。見た目だけではなく、あらゆる面において不便で、どれほど苦しくなるのでしょうか。どんなにきれいなゆびであっても、体にくっついている時にこそ意味があって、美しい事になるでしょう。もし手首がおれて全く感覚がなくなって麻痺されると考えて見ると、どれだけ悲惨な場面でしょうか。教会の中私たちもいつもキリストにあって一つの体の意識、主にある一つの体の家族の信仰をもって、これからもお互いをつながっている必要な存在、欠かせない大事な一つの体のような事を忘れないで行きたいと願います。

ヨハネ15章4節に、イエス様はぶどうの木のとえで見ると、“枝がぶどうの木についていなければ、えただけでは実を結ぶことができません。しかし、繋がっていれば必ず多くの実を結ぶとの約束”が書かれています。ぶどうの枝がいつも木についていなければいけないように、今日私たちの信仰も教会を離れてはまったきの信仰、健全な信仰を持つことができないという事を念頭においてください。

肢体の信仰って具体的にどうやってやる事でしょうか。それは無関心にしない事だと思います。もしみなさん！突然目が痛くて前がよく見えなのに‘まあ、痛かったら痛かっただけですがまんしょう。’とする人がいるでしょうか。痛い目、弱くなっている目をもっと大事にし、管理するでしょう。そして、無関心にならないで、早めに自分の体を運んで病院に行ったり、診察を受けたり、薬を飲んだり、もしそれでもだめなら、お金を出してからでも回復されるまで、ちゃんと癒されるまで、あきらめないでしょう。同じように、教会の中の我々もそうすべきです。教会の家族の中だれかが苦しんでいるのに、弱くなっているのに、自分の事じゃないからとしながら、無関心になったり、そのままほっとく事がこれからも一切ないように努力しましょう。キリストの一体の信仰、神の家族の信仰を大事にすることは弱くなっている者、いろんな悩みや苦しみの中にいる兄弟、姉妹を振り返りながら、大事にケアすることである事も教えられます。

旧約時代に教会はありませんでしたが、今まで申し上げたような主にあって一つの体、一つの共同体の信仰と意識を主の民たちにも神様は同じく教えました。例え、イスラエルの民の中でアカンという人、一人が犯した犯罪によってイスラエル民全体が苦しみ

を受け、共に前進する事が出来ず、戦いにも負けてしまいました。ダビデー人が神の前でまつたき者であることによって、イスラエルの国が統一され、祝福にあずけられました。私たちも互いにキリストにあって一つの体であることを忘れないでください。

そして私たちは教会内ではみな各自自分に与えられた賜物とキリストの愛によって仕え、働かなければなりません。

本文の 17 節はとっても正しい御言葉だと思います。体全体が目が目立つから、体の高いところにあるからみなが目になろうとしたらどうなるでしょうか。むしろ元気な元気な体の機能ができないし、むしろ怪物になってしまうでしょう。目は目なりに、耳は耳なりに手は手なりに、足は足なりにそれぞれ自分のやるべき役割があります。同じように教会内の信徒たちにもそれぞれ違う賜物が与えられています。神様は主の教会の必要に応じて各自適切な賜物を均等(きんとう)に分け与えてくださいました。教会に来て間もない方もいますが、私たちは主が主ご自身の教会にかならず、必要のため、神様が送って下ったと信じましょう。ですからその方も教会になくはない大切な存在として暖かく受け入れましょう。ですから愛するみなさん！教会内で小さなことにも主から頂いた自分の賜物をキリストの愛によってよく仕え、喜びをもって謙遜に神の家族、キリストのために、共に仕えてましょ。

聖書には名前は出されていませんが、偉大に働いた人々はたくさんありません。ダビデと共に戦っていた兵士たちや武具をもって軍人、聖殿のレンガをやり技術者、アブラハムとともにロトを救うために参加した 318 人の軍人たち、エリヤの修業学校で勉強した予備預言者たち、イエス様がエルサレムに入られる時、ロバを貸してくれた持ち主、ホザナ主を賛美したたくさんの人々、イエス様が十字架につけられたとき主のために涙流していた女たち！パウロと共にキリストの福音をのべつたえるために、惜しみなく助け、協力していた同労者たちなどこのような背後の人たちがキリストの一つの体として仕え、共に働いていたため、神は多くの信仰の人たちを通して神様の御業を成し遂げて下さったのではないのでしょうか。聖書をよく読んでみると偉大な人物たちが神様の働きをすすむ事ができた背後にはいつもともうしろで働いていた献身的な主の体、主の動労者たちがあったことを忘れないでください。

ですから、教会はけっして一人だけの力で建てられるところではありません。だからこそ私たちは教会内でお互いの存在を心から尊重しなければなりません(21 節)。だれもいらないとってはけっしていけません。争い、ねたみ、悪口などでまるでいらないようにさせてしまうことで体全体が差し支えされるようになってしまうでしょう。神様が私たち人間に与えられた体は一つも不器用(ぶきょう)なものはありません。一般の人々は盲腸(もうちょう)なんかはいらんのではないかといっているかも知れませんが、宇宙の飛行士はどんなに実力があっても盲腸がなければ宇宙船には乗れません。

<4. 教会の使命:魂の救いとイエスキリストの弟子を生み出す事>

ジョンバニアンヨーン先生は当時国内で、いつも分裂が絶えなかったイギリス教会の信徒たちの姿をこう書き記しました。“おかしい！理解できない！悪魔と戦うべき信徒たちが自分たちでお互い戦っているなんて。”私たちが戦うべき対象はサタンであることをクリスチャンたちは決して忘れないでください。私は今日地上の教会の信徒たちが一つにならないで、戦う理由は神様からの使命を教会とクリスチャンたちが失ったからだだと思います。やるべきことが残っている人は争いません。西洋のことわざに“忙しい蜂(はち)は悲しむ暇なんてない。”という言葉があります。言い換えると“忙しい蜂は争いをする暇がない”とも言えます。

愛するクリスチャンレイズチャーチの信仰の家族のみなさん！サタンを原語ギリシャ語で‘ディアブロス’と言います。この意味は告げ口する、分裂させるという意味です。悪魔は今日も一つになるべき人々が互いに告げ口を言い合い、分裂されるようにし、家庭が壊れるようにし、教会が分裂されるようにし、究極的には神様から一つの体の機関である者たちが離れるようにし、無気力させて神からのその役割と使命を結局果たせないようにする存在である事を忘れないでください。

今日の本文であるコリントの教会の特徴をじっくり読んでみてください。コリント教会には色々な霊的賜物をさずけられた人々が多くいました。コリントの信徒は、賜物、知識、熱心はすごかったのです(I コリント1:4~7)。そういうわけで第一コリント人への手紙 12-14 章では霊的賜物について扱っています。ところがこの教会の人たちはまだ肉に属して未熟だと評価されています(I コリント3:1~3)。なぜならとっても争いが多く、分裂がとってもひどい教会でした。神様から与えられた賜物はたくさんあるのにも関わらず、自分が偉い者だ、自分があの人よりました！とか、あの者はこの賜物もないから、まだ信仰が駄目じゃないか裁いたり、妬んだり、非難したりして見たいで、神様のために用いられず、サタンのわなに落ちてしまい、あらいで時間を費やしてしまったからです(I コリント3:3)。我々の教会もいつもこのコリント教会の過ちや失敗を繰り返さないように警戒し、気をつけなければなりません

ん。

そしたら、最後に主が主の教会を建てて下さった目的、そして、主の教会への使命は何でしょうか。(マタイ 28:19-20)

“それゆえ、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子とせよ。そして、父、子、聖霊の御名によってバプテスマを授け、また、わたしがあなたがたに命じておいたすべてのことを守るように、彼らを教えなさい。見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。”

愛するみなさん、この言葉は、イエスがいつ語られた言葉なのか？これは、イエスキリストが復活された後、弟子たちに最後に残して天に帰られた最後の言葉であり、地上に残される主の教会に与えて下さった使命の御言葉でしょう。ここで4つの動詞が書かれています。つまり、「行って」、「弟子とせよ」、「バプテスマを授け」、「教えなさい」この4つが動詞であります。この4つの動詞の中で、一番メインになり大切なのは、「弟子とせよ」という言葉です。これだけが命令形で後の動詞はその弟子とせよという命令形を支える分詞である事が原語の聖書通して分かります。つまり、弟子とするために、行きなさい！弟子とするために、バプテスマを授けなさい！弟子とするために、教えなさい！ という意味であります。

そして、弟子とするという意味は、二つがあります。まず、人の魂を救うこと、救われなければ弟子となる事もできないでしょう。そして、キリストの弟子となるために育てなさいということでもあります。我々は教会が何をすべきなのかがここで分かります。これが教会しかできない教会の明確な使命であり役割でもあります。周辺のものはたくさんあります。教会が貧しい人を助けたり、社会的な働きだったり。それも大切なことだが、それより、人々を救い出して、神の前にキリストの弟子となるために支えることが教会の大きな役割であると言えるでしょう。

キリストがご自身の主の教会をこの世の中に残して下さいました。今我々にはどれだけやる事がいっぱいあるでしょうか。神の救いを待っている15万人のこの地域の魂をみてください。目を上げて遠くみてください。日本の1億2千5百万人、世界70億のたましいのためにキリストの愛を持って尊い1人の魂の救いのために共に仕え、心を注ぐべきではないでしょうか。決してケンカする暇もないし、細かい事に私たちの心を奪われないし、むしろ教会ではいつも一つとなってみなでともに協力しなければなりません。

ピリピ人への手紙 2章 3-4節の御言葉のように私たちは教会内でいつもへりくだって互いに人を自分よりもすぐれた者と思い、自分のことだけでなく、他の人のことも顧みなければならぬ事を教えて下さっています。私はもっと積極的にクリスチャンプレイズチャーチがこのことを覚え、互いにキリストの愛と御言葉と祈りという良い栄養を供給(きょうきゆう)しあい、それによって互いの器官がさらにつよくなることによって神様の祝福を味わう教会となしてほしいです。

使徒の働き20章35節をどなたが読んでくれますか。“このように労苦して弱いものを助けなければならないこと、また、主イエスご自身が、「受けるよりも与えるほうが幸いである。」と言われた御言葉を思い出すべき事を、私は万事につけ、あなたがたに示してきたのです。”という御言葉があります。この御言葉を我らの教会がつかむべき神様の祝福だと信じます。受けるよりも与えるほうが幸いだといわれます。

今日の本文次の第一コリント 13章はあの有名な愛に関する御言葉でしょう。神様はいかに素晴らしい他の賜物たちより、主の教会にはキリストの愛を与える、その愛に仕えあい、愛し合う事が何よりも大事である事を教えて下さっているのではないのでしょうか。我らの教会にはこのような分け与える愛があるので私はいつも心から感謝しています。

私たちの教会がどんなに大きくなって、人が増えていてもこの分け与え仕える愛は失わないでつけて保っていきましょう。今まで私たちの教会を訪ねた人々からこの教会は本当に愛と喜びがある教会だとよく言われました。どれだけうれしいし、感謝なのかわかりません。私たちが一つの体であり、同じ枝である事実を覚えるなら、私たちはいつも自分の体を大切に、健康のためによく管理し、よい食べ物を食べるように、教会の一つの体になる兄弟姉妹のためにこれからも積極的にキリストの愛を持って仕え、お互い支えあって行くクリスチャンプレイズチャーチとなるように祝福します。

最後に一緒に本文の25-27節と一緒に読みましょうか。“それは、からだの中に分裂がなく、各部分が互いにいたわりあうためです。もし一つの部分が苦しめば、すべての部分がともに苦しみ、もし一つの部分が尊ばれば、すべての部分がともに喜ぶのです。あなたがたはキリストの体であって、一人一人は各器官なのです。”アーメン!

1 世紀の初代教会は信徒の数は多くありませんでしたが、ひどく迫害された教会でした。この世は彼らを迫害しました。しかし使徒の働きによるとおどろきますが、初代教会はこの世で迫害はされましたが、同時に賞賛を受けました。世は主の弟子たちを迫害し、クリスチャンたちを迫害しましたが、彼らを認めざるを得ない一つがありました。当時、遊女(ゆうじょ)や淫乱で偽りの愛にみちていたコリントの町で、彼らは互いに真の愛をあらわしていました。そのため彼らは賞賛されたのです。‘見よ。彼らはどれだけ真実で犠牲的な愛をあらわしているのか！’

命にかかる危険な瞬間にでもまず自分と自分の家族を守ろうとはしませんでした。この初代教会の愛がついに巨大な岩のようだった大ローマ帝国を変え、この世を変える事ができたのです。今日も私たちが一つになるとき神様は私たちをも豊かに用いてくださると信じます。私たちがまず互いに愛し合い、仕えあい、犠牲をはらうとき私たちをとおしてキリストの真の愛がさらに広がっていくと信じます。

私たちは孤独な世に住んでいます。友達に会っても、隣人にあっても、心には感激がありません。なぜならまことの愛がないからです。教会という囲いの中で、教会の家族に会うたびに感激し、苦しみと喜びをともに分け合う愛の共同体! 神様はそんな私たちの共同体、クリスチャンプレイズチャーチを通してこの地域とこの世を変えていくと信じます。

< 最後の読み物 >

マザーテレサが生存のとき、アメリカの議会で演説されたことがあります。アメリカの人々はいつもすばらしい演説が終わると演説者に向かって拍手を送ります。本当にすばらしい演説だったとすると起立拍手を送ります。ところがテレサの演説が終わったときは一人も拍手をしなかったそうです。正確にいうと拍手を送らなかったのではなく、拍手を送る余裕がなかったようです。息詰まる感動が彼らの首とむねをおさえていたからです。それは演説の最後にテレサが言った一言のためだったそうです。“仕えることを知っている人こそ治める資格があります。”

自分を表そうとする人は神様の働きをすることができません。認められると働き、認められないと働かないことは自己否定ではありません。神様の働きをするときには自分を隠し、自分を死なせなければなりません。

“父がやりなさいと言われたことを愛で成し遂げたので父にその栄光をお返しします。”

主の教会の中で今日も集っているクリスチャンプレイズチャーチの我々にこの告白ができるように心からお祈り申し上げます。